

ベトナム語の機能語 *của, sự, không, bị* の文法化過程

—16～19 世紀の文献から—

鷺澤拓也

takuyawas@gmail.com

キーワード: ベトナム語 歴史言語学 文法機能語 (虚詞) 文法化 書記言語形成
チュノム 属格 名詞化 否定 受身

要旨

ベトナム語で、16 世紀までは内容語だったが現代までに文法機能語になった *của, sự, không, bị* の 4 語を取り上げ、それらの語がいつ頃文法化したのかを明らかにする。16～19 世紀の各世紀から 1 点ずつ文献を取り上げ、その中での各語の全用例を検討し、他の文献も参照した結果、少なくとも書かれた言語においては、属格を表す *của* (名詞「財産」から文法化) と名詞化を表す *sự* (名詞「こと」から) は 19 世紀末以降、否定の副詞 *không* (「空 (から) の」「虚しい」「空 (くう) から) と受身や被害を表す助動詞 *bị* (動詞「被る」から) は 18 世紀後半から 19 世紀前半に、それぞれ文法化されたといえることがわかった。これらのうち特に *của* と *sự* については、同じ用法の他の語にこれらが取って代わったのでない。属格や名詞化といった文法事項そのものが、19 世紀以降に新たに明示されるようになったのである。同様の文法化の現象は、通言語的に見られる。書記言語としての使用が稀であったベトナム語が、19 世紀に書記言語として用いられるようになったのと時期的に重なっていることから、これらの文法化現象は、ベトナム語が書記言語の形成過程の中で、高級語彙と共に文法表現も拡充し、学問や行政などでの複雑な表現の要求に堪えうる言語となっていくことも示唆している。

1. はじめに

孤立語であり語形変化や接辞のないベトナム語¹ では、文法の表示は語順と文法機能語によりなされる。現代ベトナム語に見られる機能語のうちいくつかは、16 世紀以前には内容語 (実質的な意味を持つ語) であり、文法化したと考えられる。そのうちいくつかは、同じ用法の他の語に取って代わったのではなく、文法現象そのものが新たに現れたものもある。本稿では、16～19 世紀の文献中の *của, sự, không, bị* の 4 語の用法・使用頻度を調べ、各語の文法化の過程を検証する。

¹ 基本語順は SVO、後置修飾。1 音節がほぼ 1 形態素となる。現代の正書法ではラテン文字で表記される。母音 : a [a],[a:]; ă [a]; â [ə]; e [e]; ê [e]; i, y [i]; o [o]; ô [o]; ơ [ơ]; u [u]; ư [ư] 子音 : b [b]~[β]; c, k, q(u) [k]; ch [tʃ]; d, gi [z]; đ [d]~[d̥]; g, gh [ɣ]; h [h]; kh [x]; l [l]; m [m]; n [n]; ng, ngh [ŋ]; nh [ɲ]; p [p]; ph [f]; r [z]~[ʒ]; s [s]~[ʃ]; t [t]; th [tʰ]; tr [tʃ]~[tʃʰ]; v [v]; x [s] 声調 (調値) : a 44; à 21; á 35; ả 312; ã 325 (喉頭化を伴う); a 31(喉頭化を伴う) (川本 2011:1906-1913)。16 世紀までは、漢字の組み合わせ・変形・転用により作られたベトナム固有の表語文字チュノム (字喃) での表記に限られ、17 世紀以降にラテン文字表記が用いられるようになって、20 世紀前半までチュノムは併用された。

Hopper & Traugott (1993: 130-166) には内容語から機能語への変化にとどまらない、接語や接辞にまで及ぶ文法化の現象が述べられているが、ベトナム語には顕著に弱く発音される音節がなく、接語や接辞と断定できる形態素がないため、内容語から機能語への文法化に限定される。ベトナム語の文法史に関して、これまで包括的・数量的な研究はなされてこなかった。² 数少ない先行研究のうち、Nguyễn Thị Thanh Xuân (2015: 203)³ は本研究でも取り上げる Trương Vĩnh Ký (1881) と Nguyễn Trọng Quản (1887) を近代的な文章の先駆けとして捉えつつ、その中の現代語と異なる言語表現について述べているが、歴史的な変化として扱っていない。Đinh Văn Đức (2018: 515-530) は 17～18 世紀のラテン文字資料(キリスト教関係)における文法的特徴と、現代語と異なる機能語の用法について言及しており、文法史研究の端緒といえる。

2. 各文法機能語の 16 世紀までと現代の用法の概要

本稿で取り上げる 4 語の 16 世紀までの用法(内容語)と、現代の機能語としての用法をまとめると以下ようになる。

・Của

16 世紀まで: 「財産」「もの(所有物)」を意味する名詞

現代: 属格を標示する前置詞

・Sự (「事」の漢字音)

16 世紀まで: 「こと」を意味する名詞

現代: 2 音節の動詞や形容詞に前置し、名詞化する語

・Không (「空」の漢字音)

16 世紀まで: 「空(から)の」「虚しい」を意味する形容詞、「空(くう)」を意味する名詞

現代: 否定を表す副詞

・Bị (「被」の漢字音)

16 世紀まで: 「被る」を意味する動詞

現代: 受身や被害を表す助動詞

3. 各文法機能語の現代ベトナム語での用法

² 機能語は内容語との判別が難しい場合も多く、内容語を扱うのと同じような方法論で語彙論の一部としても扱われやすい。またベトナム語史の研究一般にいえることとして、19 世紀半ばまで(主な書記言語が漢文)、特に 16 世紀以前(ラテン文字表記考案前)のベトナム語の資料が少ないこと、そのために各語の古い用法や起源を知ることが難しいこと、チュノムや古いラテン文字の資料は読み方を明らかにする文献学的な研究が主なものとならざるを得なかったことが障壁として挙げられる。

³ ベトナムの学術的慣習に従い、ベトナム人の著者はフルネームで記す。

3.1. Của

代表的な現代ベトナム語の辞典 (Hoàng Thị Tuyên Linh 2011) によると、của は所有・包含・所属・起源等の関係などを表す前置詞である。⁴ 日本語の助詞「の」の意味と重なるところが多く、総合して「属格」の標識とすることができる。Nguyễn Tài Căn (1975: 237-238) は、素材の関係を表す bằng、内容や題目に関する関係を表す về、位置的な関係を表す ở 等と並列して、「関係を表す語 (quan hệ từ)」として説明している。これらも日本語で表すと「の」となることがあるため、対照させて示すためここに例を挙げる。

(1) nhà của cha tôi
家 の 父 私
“私の父の家”

(2) sinh viên của trường này
学生 の 学校 この
“この学校の学生”

(3) sân bằng gạch
床 ~による レンガ
“レンガの(でできた)床”

(4) quan điểm về triết học
観点 ~について 哲学
“哲学についての観点”

(5) nhân dân ở nội thành
人民 ~にいる 市街
“市街の人民”

なお、修飾語が被修飾語の事物の特徴を表す事物の場合、被修飾語と修飾語の間に何も入らない。例: ruộng lúa (田んぼ/畑 + 稲 → 稲田); nước đường (水 + 砂糖 → 砂糖水)。また、関係を表す場合でも、前置詞を省略することができる場合は多く、(1)~(5) のすべての例において、関係を表す語は省略できる。

(1') nhà cha tôi
家 父 私
“私の父の家”

関係を表す語(特に của)を付ける場合と付けない場合について、Nguyễn Tài Căn (1976:238-239) は、以下の a) ~ c) のような場合を述べられている。

a) 修飾語が被修飾語に隣接し、意味関係が明らかな時、省略できる。
例：

(6) cha Ø tôi
父 私
“私の父”

(7) chân Ø nó
足 彼/彼女
“彼/彼女の足”

⁴ 他に、「財産」や「食べ物」を表す名詞の記載があるが、古風・慣用的な言い回しに限られる。

b) 修飾語が被修飾語に隣接していても、意味関係が明確でなく、異なる解釈が可能な場合、誤解を避けるために関係を表す語が置かれる。

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| (8) ý kiến <u>của</u> trên | (9) tình yêu <u>của</u> chồng |
| 意見 の 上 | 情 愛する の 夫 |
| “上 (の人) の意見” | “夫の愛” |

(8) では của を省略すると “上記の意見” の意になる。(9) では của を省略すると “夫を愛する思い (夫への愛)” の意になる。このように、「関係を表す語」を用いることにより、修飾語の意味を区別したり、後置される要素が修飾語かどうかを明確にしたりすることができる。

c) 修飾語が被修飾語から遠くにあり、隣接しない場合、意味を明確にするために、関係を表す語が付される。

- (10) Những tấm ảnh cũ của tôi
 複数 類別詞 写真 古い の 私
 “私の数枚の古い写真”

(10') * Những tấm ảnh cũ Ø tôi

Hoàng Dũng & Nguyễn Thị Ly Kha (2004: 28) は、của の省略可能性について、của の前の要素別に論じている。

・名詞：省略可能

- (11) sách của tôi → (11') sách Ø tôi
 本 の 私
 “私の本”

・類別詞：省略不可能

- (12) quyển của tôi → (12') * quyển Ø tôi
 類別詞⁵ の 私
 “私の (本)”

・「類別詞 + 名詞」：省略不可能

- (13) quyển sách của tôi → (13') * quyển sách Ø tôi
 類別詞 本 の 私
 “私の本” ((11)よりも具体的な対象としての本を指す)

・「類別詞 + 名詞 + 修飾語」：省略不可能

⁵ Quyển は書籍類に使う類別詞。数える際は日本語の助数詞「冊」に近い。なお、類別詞は quyển này (類別詞 + 「この」 → 「これ」) のように、具体的な名詞を伴わずに用いられる場合もある。

- (14) *quyển sách xinh xắn của tôi* → (14') * *quyển sách xinh xắn Ø tôi*
 類別詞 本 きれいな の 私
 “私のきれいな本”

被修飾語(所有対象)を省略し、「*của* + 所有者」⁶のみで名詞句を形成することもできる。(Nguyễn Hoàng Anh 2004:152-153)⁷

- (15) *Áo của tôi mới hơn Ø của bạn.*
 服 の 私 新しい ~より の 君
 “私の服は君のより新しい。”

Của はまた、動詞に後置する副詞句を形成する前置詞となることもできる。これは以下の *cho* や *bằng* と同様に述べられうる(以下の各例で *của, cho, bằng* はすべて省略可能)。(Nguyễn Tài Căn 1975:276)

- (16) *vay của bạn* (17) *tặng cho em*
 借りる の 君 贈る ~に あなた
 “君から借りる”⁸ “あなたに贈る”

- (18) *ăn bằng đũa*
 食べる ~で 箸
 “箸で食べる”

また *của* には、節に前置する用法もある。これは以下の *mà* や *do* と同様に述べられうる。(Nguyễn Tài Căn 1975:243-244)

- (19) *Bức thư của tôi viết*
 類別詞 手紙 の 私 書く
 “私の書いた手紙”⁹

⁶ 本論文での「所有対象」と「所有者」という用語は、所有の意味に限らず、*của* を用いるものに代表されるベトナム語の属格表現一般に対して当てはめられるものとする。“A *của* B”の構造において、A が所有対象、B が所有者となる。なお、「被修飾語」は所有対象と同様に A、「修飾語」は“*của* B”となる。

⁷ これは、中国語との対照研究の中で述べられたものである。中国語でも、「所有者 + 的」のみで名詞句を形成することができる(Nguyễn Hoàng Anh 2004: 108)。日本語で「所有者 + の」で名詞句を作ることができるのと同様である。

⁸ Nguyễn Tài Căn (1975:276) は動詞 *vay* に後置される要素を「失う人、損失する人」と分類している。なおこの *của* の用法は、辞書 (Hoàng Thị Tuyền Linh 2011) には載っていないため、あまり一般的な用法ではないと考えられる。

⁹ この用法も辞書 (Hoàng Thị Tuyền Linh (2011) にはないため、一般的な用法ではないと考えられる。

- (20) Người học sinh mà chúng ta gặp hôm qua
人 生徒 関係詞 私達 会う 昨日
“私達が昨日会った生徒”

- (21) Phái đoàn do đồng chí X dẫn đầu
使節団 ~により 同志 X 率いる
“X 同志により率いられた使節団 (X 同志が率いる使節団)”¹⁰

これらの場合でも、関係詞は省略することができる。

- (19') Bức thư Ø tôi viết

- (20') Người học sinh Ø chúng ta gặp hôm qua

- (21') Phái đoàn Ø đồng chí X dẫn đầu

3.2. Sự

現代ベトナム語の辞典 (Hoàng Thị Tuyền Linh 2011) によると、sự は「事 (việc)、話 (chuyện)」を表す名詞、また、活動・動作や性質を名詞化 (事物化) する働きを持つ名詞である。前者の用法は、古風または慣用的なものに限られ、現代ではほぼ後者の用法となるため、文法機能語となっているといえることができる。前述の辞書で挙げられている例は、sự đau đớn 「苦痛」(đau đớn: 「痛ましい」)、sự cố gắng 「努力」(cố gắng: 「頑張る」) 等。

Nguyễn Thị Thuận (2003: 61) によると、名詞化のために主に用いられる名詞は sự と việc の 2 つだが、sự は動詞 (または形容詞) のみの名詞化であるのに対し、việc は動詞句または節全体の名詞化であり、việc により名詞化される内容はより具体的である。また、以下のような制約がある。

- ・Sự の後には常に 2 音節以上¹¹の動詞または形容詞が置かれる (Nguyễn Thị Thuận 2003: 53)¹²
- ・“Sự + 動詞” の後に動詞の目的語を置く場合は前置詞が必要 (Nguyễn Thị Thuận 2003: 71)

- (22) Kỳ vọng sự phát triển của kinh tế Việt Nam
祈望する 名詞化 発展させる ~の 経済 ベトナム
“ベトナム経済の発展を祈望する。”

- (22') *Kỳ vọng sự phát triển Ø kinh tế Việt Nam.

¹⁰ Do (「由」の字音) は「主語 + do + 動作主 + 動詞」で受動文と捉えられる文を作ることができる。(Phái đoàn này do đồng chí X dẫn đầu. 「この使節団は X 同志により率いられている」、này: 「この」) Do を用いる場合、動作主は省略不可。(Bị や được を用いる受動文とは異なる。) このことから、do を用いた受動文は動作主に焦点が当てられていると考えられる。

¹¹ ベトナム語では 1 音節の語は具体的、2 音節以上の語は抽象的な意味を持つ傾向がある。

¹² Sự sống 「命」(sống: 「生きる」) と sự chết 「死」(chết: 「死ぬ」) は例外。

- (23) Tôi tức giận anh ta. → (23') sự tức giận đối với anh ta của tôi “彼に対する私の怒り”
私 怒る 彼 (23')? sự tức giận của tôi đối với anh ta (đối với: 「～に対して」)
“私は彼を怒る” (23'') * sự tức giận anh ta của tôi

これらの制約は、việc と対照をなしている。すなわち、文の構造が複雑で、名詞化の明示により構造がよりわかりやすくなるような場合以外、việc は 2 音節以上の動詞の前に来ることは稀である (Nguyễn Thị Thuận 2003: 50)。¹³ また、例文 (23) の「怒る」ような、状態や長期間にわたる行動は việc で名詞化できない (Nguyễn Thị Thuận 2003: 53)。“Việc + 動詞”の直後に “của + 名詞” 「～の」を置くことはできない (Nguyễn Thị Thuận 2003: 61)。¹⁴

なお、文法機能語を使わない名詞化も可能であり、使う場合と意味の違いがある。¹⁵ Nguyễn Thị Thuận (2003) は他に、動詞・形容詞・動詞句を名詞化する語として、cuộc, cái, nỗi, niềm, chuyến, trận, cơn, hiện tượng, vụ, chuyện を挙げ、それぞれの用法の違いを述べている。

3.3. Không

Không の用法は主に文法機能語としてのものであり、動詞の前に置かれて否定、文末に置かれて諸否疑問を表す副詞である。文法機能語でない用法としては、数字の「ゼロ」や、用例は稀だが「空 (から) の」「虚しい」を表す形容詞、「何もないところ」「空 (くう)」の意の名詞としても用いられる。(Hoàng Thị Tuyền Linh 2011)

- (24) Tôi không thích món này.
私 否定 好む 料理 この
“私はこの料理が好きではない。”

- (25) Chị có khỏe không?
貴女 疑問¹⁶ 元気だ 疑問
“貴女は元気ですか。”

3.4. Bị

Bị は現代ベトナム語において、主語が喜ばしくないまたは利益のない動作を被ることを表す動詞とされる。(Hoàng Thị Tuyền Linh 2011)

¹³ 2 音節動詞の前に việc が用いられる複雑な文の例: Việc đổi mới chính sách đầu tư của chính phủ đã được các đối tác nước ngoài đánh giá cao. “政府の投資政策刷新は外国のパートナーに高く評価された。” (đã の前までが主語)

¹⁴ 例文 (22) 中の一部を việc を使って名詞化させる場合、việc phát triển kinh tế của Việt Nam “ベトナムの経済を発展させること” となる (Nguyễn Thị Thuận 2003: 61)。

¹⁵ 例: Uống cà phê luôn luôn làm tôi mất ngủ. {uống: 飲む, cà phê: コーヒー, luôn luôn: いつも, làm: する・使役, tôi: 私, mất: 失う, ngủ: 眠る} “コーヒーを飲むといつも私は不眠になる。” / {Việc / *Sự} uống cà phê làm tôi mất ngủ. “コーヒーを飲むことにより私は不眠になった。” (Nguyễn Thị Thuận 2003: 44)

¹⁶ Có は強い肯定の際に動詞や形容詞の前に置かれ、英語の do と同様、疑問の際にも慣用的に動詞や形容詞の前に置かれる。

(26) Tôi bị ngã.

私 被る 倒れる

“私は倒れてしまった。”

(27) Tôi bị ốm

私 被る 病気だ

“私は病気です。”

このように、bị が用いられるのは必ずしも受身の場合に限らないが、自分が対象となる動作に使われる場合、いわゆる受身の文になるといえる。

(28) Tôi bị đánh.

私 被る 殴る

“私は殴られた。”

この時、動作の前に動作主を置いて「(動作主) が…するのを被る」という文を作ることができる。英語やフランス語等との対照で「主語 + bị + 動作主 + 動詞」で受身の文となると説明されることが多いが、実際の口語でこの構文が用いられることは比較的稀である。

(29) Nó bị bố đánh.

彼 被る 父 殴る

“彼は父に殴られた。”

なお、被害や迷惑でなく恩恵を被る受身の場合には được (本来の意味は「得る」) を用いて、bị と同様に動作等の前に置いて表現することができる。「主語 + được + 動作主 + 動詞」(「動作主が…するのを得る」) の構文は、bị の場合と同じく口語で用いられることは稀だが、恩恵を被る場合の受身文と説明されることが多い。

(30) Nó được bố khen.

彼 得る 父 褒める。

“彼は父に褒められた。”

4. 分析対象文献

16～19 世紀の各世紀から代表的な文献を 1 点ずつ取り上げ、主な分析対象とする。成立年代が明確または定説があること、大部分が散文であること、現代式の表記に転写されたものが出版されていること、電子データがあること、文献に対して言語学の先行研究があることを基準に選定した。

・ 16 世紀：『新編傳奇漫録増補解音集註 (*Tân biên Truyền kỳ mạn lục tăng bổ giải âm tập chú*)』
(以下、『新編傳奇漫録』)

16 世紀末に漢文で書かれた伝奇(幽霊、妖怪、霊界などを扱う)の説話集(『傳奇漫録』)に古ベトナム語(チュノム)の訳文が割注で書かれた対訳資料。4 巻からなり、5 話で 1 巻を成す。原作者は阮嶼(げんよ、Nguyễn Dữ)、翻訳者は阮世儀(Nguyễn Thế Nghi) とされる。

原文は漢文で書かれているが、場面や登場人物はベトナムのものである。Nguyễn Quang Hồng (2001) に 1774 年版の刊本のコピーと、チュノム訳文部分のラテン文字翻字がある。現代ベトナム語訳は、Ngô Văn Triện が 1901 年から 1947 年にかけて翻訳したものが広く知られており、Hoàng Đức Quảng et al. (1994) にフランス語訳と共に掲載されている。ラテン文字表記が考案される前にベトナム語（チュノム）で書かれた資料のうち、韻文でないものとして貴重な資料であるが、原文の漢文と逐語的に対応しているという特徴があり、日本の漢文訓読体と同様、語の用法が漢文と酷似している場合があることや、より古い形が残っていると思われるものもあることに、注意を要する。

・17 世紀：Rhodes (1651a) 『8 日間の講義 (*Phép giảng tám ngày*)』(略称。正式名称は参考文献一覧参照)

ラテン文字表記が考案された後、早い時期に書かれた代表的なカトリックの教理書。ラテン語との対訳資料。

・18 世紀：ルイ神父が教会の各聖職者と信徒たちに送った手紙 (*Thư cha Lui gửi cho các thầy cả và anh em bản đạo giữ lề luật Igheresa*) (以下、「ルイの手紙」) (1755 年)

18 世紀の希少なラテン文字資料。Đoàn Thiện Thuật (2008 : 270-273) に収録、現代式翻字がある。

・19 世紀：Trương Vĩnh Ký (1881) 『1876 乙癸年の北圻訪問 *Chuyến đi Bắc Kỳ năm Ất Hợi 1876*』(以下、『北圻訪問』)

近代文学の先駆けとなる代表的な作品の 1 つ。南部出身者による北部ベトナムの旅行記(随筆)。

その他、各時代の辞書として Rhodes (1651b)、Taberd (1838)、Huỳnh Tịnh Paulus Của (1895)、*Ban văn học Hội Khai trí tiến đức khởi thảo* (1931) (以下、*Khai trí* (1931) と記す)、および Hoàng Phê (1988) を、参考資料として『佛説大報父母恩重經』¹⁷、『國音詩集』¹⁸、Maiorica (1623)¹⁹、18 世紀の 41 通の手紙²⁰、Nguyễn Trọng Quản (1887) ²¹を用いる。

5. 対象文献中での用例

上記 4 文献における分析対象の 4 語の用法は、現代の機能語としての用法と異なるものが多い。

¹⁷ 12 世紀または 15 世紀の漢文-チュノム・ベトナム語対訳仏教書。Hoàng Thi Ngo (1999) に全文のコピーと、チュノム訳文部分のラテン文字翻字がある。

¹⁸ 15 世紀にチュノムで書かれた詩集。阮鷹 (Nguyễn Trãi) 著。Trần Trọng Dương (2014) に全文がある。

¹⁹ 17 世紀前半のカトリック問答式教理書。ベトナム初のキリスト教教理書といわれる。イエズス会の宣教師 Jeronimo Maiorica (1591-1656) の作。チュノムによるベトナム語のみで書かれている。教会内部向けに 2003 年に原文複写とラテン文字翻字が出版されている。

²⁰ Đoàn Thiện Thuật (2008) に全文がある。

²¹ 19 世紀のベトナム初の近代的散文小説、ラテン文字で書かれている。

・ *Của*

(31) 漢: 積財如熾火 [財を積むこと熾火のごとし] (16 世紀『新編傳奇漫録』 <I:56a:7>) ²²

喃: 積 貼 朋 焔 盛
Tích của bằng lửa thịnh.
積む 財産 ~のように 火 盛んな
“財産を燃え盛る火のように積んだ。”

(32) *Chớ* tham của người! (17 世紀『8 日間の講義』 p. 302) ²³

~するな 食る もの 人
“人のものを食ってはならない。”

例文 (32) の *của* の用法は、(15) のような現代ベトナム語における所有対象の省略と形式上類似しているが、現代ベトナム語では具体的な被修飾語が考えられるのに対して、(32) のような用例では省略された部分に該当する既出の語がなく、漠然とした「もの」を指すに過ぎない。ただし、(32) のような用例は、文法化がこのような用法から起きたことを示唆している。

・ *Sự*

(33) 漢: 遂夫妻講歡論舊 [遂に夫妻歡を講じ舊を論ず] (16 世紀『新編傳奇漫録』 <IV:38a:3>)

喃: 卞 媾 軼 講 事 盃 論 事 婁
Bèn vợ chồng giảng sự vui, luận sự cũ,
すぐに 妻 夫 講ずる 事 嬉しい 論じる 事 古い
“そこで夫婦は嬉しかったことを語り合い、昔のことを論じ合った。”

(34) *sẽ* nói về sự đi xuống Phát Diệm (19 世紀『北圻訪問』 p. 21)

意思 言う ~について 事 行く 下る ファットジエム (發艶、地名)
“後でファットジエムに下ることについて言うつもりだ”

例文 (33) では、*vui* 「嬉しい」、*cũ* 「古い」といった 1 音節語に *sự* が付いており、意味も「嬉しさ」や「古さ」ではなく「嬉しかったこと」「昔のこと」であるため、名詞化の機能を持っているのではなく「こと」を表す名詞であると見なせる。(34) では、*sự* の後に 2 音節の動詞が続いているが、*đi* と *xuống* それぞれの独立性が高く、その後 *Phát Diệm* の前に前置詞がないため、現代語の用法とは異なる。現代語ではこのような場合は *sự* ではなく *việc* を使うこととなる。

²² 「漢」は漢文の原文 (便宜的に日本式訓読を付す)、「喃」はチュノムによる古ベトナム語の訳文、その次の行に、現代正書法に準じたラテン文字翻字、グロス、和訳。「<>」の中は順に、巻数 (I~IV)、頁数 (a は表、b は裏)、行数で、例文の最初の漢字の箇所を表す。

²³ ラテン語文では *Non desiderabis rem alienam*. 現代フランス語訳版では *Tu ne désireras pas le bien d'autrui*.

・ *Không*

(35) 漢: 色是空空是色 [色是(こ)れ空、空是(こ)れ色なり] (『新編傳奇漫録』 <I:79a:2>)

喃: 色衣空空衣色

Sắc ấy không, không ấy sắc

色 それ 空 空 それ 色

“色は空(くう)であり、空(くう)は色である。”

(36) 漢: 獨處空房 [獨(ひと)り空房に處(を)る] (『新編傳奇漫録』 <IV:8a:4>)

喃: 蔑 尙 於 鬪 空

Một mình ở buồng không.

ひとり いる 部屋 空の

“ひとりで何もない部屋にいた。”

(37) *xác không* (17世紀『8日間の講義』、18世紀『ルイの手紙』 隨所)²⁴

肉体 空の/虚しい

“空の(虚しい)肉体”

(35)では「空(くう)」、(36)、(37)では「空(から)の」、「何もない」「虚しい」という意味で *không* を使っている。これらは現代語でも稀に見られる用法だが、機能語としての用法とは異なる。

・ *Bị*

(38) *Vua An Dương Vương bị tinh gà ác và phục quý núi Thất Diệu* (『北圻訪問』 p.8)

王 安陽王 被る 悪霊 烏骨鶏 と 悪魔 山 タットジエウ (七曜)

“安陽王は烏骨鶏の悪霊とタットジエウ山の悪魔にやられた(魔法をかけられた)”

この例文では *bị* の後に動作が書かれていないため、現代語の用法と異なり、「被る」を意味する動詞として使われている。

6. 数量的分析

各分析対象文献の中で、各語の使用頻度と、そのうちで現代ベトナム語の文法機能語と同様の用法で用いられている回数をまとめる。ただし、機能語か内容語かの判別が難しい場合は、前述のような現代語における各機能語の統語的使用条件および文法化以前の用法との比較をもとに以下のような基準を設け、これらを満たすものを便宜的に機能語と見なした。

²⁴ 同文献中の表記は“*khoú*”。17・18世紀のラテン文字表記においては、両唇・軟口蓋同時調音の鼻音[ŋm]を音節末に持つ音節には *ô* や *ú* の字が用いられている。現代正書法との対応は、-ong: -aô [-əŋm], -ông: -ôú [-oŋm], -ung: -ú [-uŋm]

- **Của** : 名詞と名詞に挟まれていること。²⁵
- **Sự** :
 - 2音節以上の動詞または形容詞の前に置かれること。
 - 後続の動詞または形容詞の後に目的語等が直接置かれず、間に前置詞等があること。
- **Không** : 動詞または形容詞の前に置かれて否定を表す、または文末に置かれて疑問を表すこと。
- **Bị** : 動作主と動作が後に続くこと。²⁶

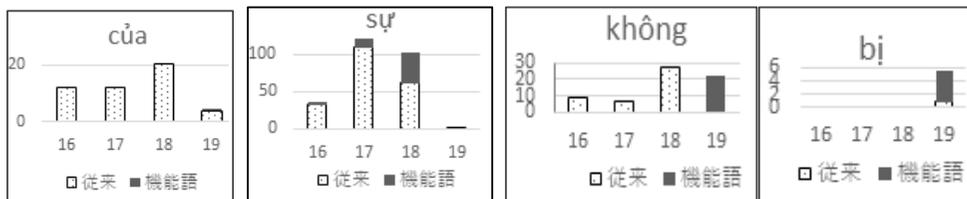
各語が出現する回数(「全体」と、そのうちで現代ベトナム語の文法機能語と同様の用法で用いられている回数(「機能語」)、およびその割合(単位は%)をまとめると、表1のようになる。

表1: 各文献における各語の出現数と、現代語と同様の機能語の用法の出現数

文献	新編傳奇漫録			8日間の講義			ルイの手紙			北圻訪問		
年代	16世紀末			1651年			1755年			1881年		
総音節数	44,638			52,513			1,460			12,583		
	全体	機能語	割合	全体	機能語	割合	全体	機能語	割合	全体	機能語	割合
của	55	0	0	63	0	0	3	0	0	6	1	16.7
sự	161	18	11.2	571	75	13.1	15	6	40.0	3	0	0
không	40	0	0	32	0	0	4	0	0	28	28	100.0
bị	0	0	-	0	0	-	0	0	-	7	6	85.7
合計	256	18	7.0	666	75	11.26	22	6	27.3	44	35	79.5

文献の音節数を1万音節に均した時の出現数と、そのうちの機能語の出現数をグラフにすると、図1のようになる。(横軸の数字は世紀。「従来」=「全体」-「機能語」)

図1: 各文献における各語の出現数と、現代語と同様の機能語の用法の出現数(1万音節毎)



²⁵ 例文(15)のような、明確に想定されている所有対象が省略されている例は、本稿の対象文献では見出せなかった。

²⁶ 動作主を明示せず“bị+動作”のみでも受身を示せるが、対象文献ではこのような用例はなかった。

4 文献をもって各世紀の代表とするならば、次のようなことが言える。*Của* の内容語としての使用頻度は 18 世紀を頂点に減少するが、19 世紀においても機能語としての使用頻度は高くない。*Sự* も 19 世紀には使用頻度が激減し、機能語としての用例も見られない。*Không* は 18 世紀に内容語として頻繁に利用されていたが、19 世紀には機能語としての使用が取って代わり、頻繁に用いられている。*Bị* は 18 世紀までの対象文献では用例が見られず、19 世紀に僅かな内容語としての用例と、より多くの機能語としての用例が見られる。以下、他の文献も参照しながら、これらの語が文法化した過程を検証する。

7. 各時代の辞書における記述を通じた分析

・ *Của*

- Rhodes (1651b)、Taberd (1838) : ラテン語訳では “res” (もの) とだけ書かれており、用例でも、一般名詞としての用法のみが記述されている。

- Huỳnh Tịnh Paulus Của (1895) : 財産やものを表すという一般名詞としての記述の他に、「しばしば、属することを表す語として言う」²⁷ と、属格の用法も書かれており、40 ある用例のうち 1 つ²⁸ に属格の用法が書かれている。

- Ban văn học Hội Khai trí tiến đức khởi thảo (1931) (Khai trí (1931)) : 一般名詞としての項目と別に、属格を表す *của* の項目が設けられている。

- Hoàng Phê (1988) : 1 つの *của* の項目の中で、一般名詞の記述の約 2 倍の分量で属格の用法が記されている。

・ *Sự*

- Rhodes (1651b)、Taberd (1838) : ラテン語の “res” (「もの、こと」) 等の一般名詞としての訳語が当てられており、用例の中で 6. に設けた現代の機能語の基準を満たすものは、Rhodes (1651b) 中の “sự buôn bán” (“buôn bán”: 商売する) と “sự dâm dục” (“dâm dục”: 好色の) の 2 つのみ。ただし、この 2 例での訳は「～に關すること」とあり、²⁹ その他の例も「*sự*+名詞」で「～に關すること」のようなものであることから、この 2 例を動詞や形容詞の名詞化という機能語的な用法と認めることは難しい。

- Huỳnh Tịnh Paulus Của (1895) : 上と同様に “việc” 等の「こと」を表す名詞で説明されており、用例の中に現代の機能語の基準を満たすものはない。

- Khai trí (1931) : 意味として “việc” とのみ書かれており、用例の中で現代の機能語の基準を満たすものは、“sự học hành” (勉学)³⁰ のみである。

- Hoàng Phê (1988) : 一般名詞としての記述の後に、その 2 倍の分量で機能語としての用法

²⁷ “Thường nói như tiếng nói thuộc về, chi về.”

²⁸ “Của ai” (誰の、誰かの)

²⁹ ポルトガル語訳 (17 世紀当時) とラテン語訳はそれぞれ、“sự buôn bán”: “o que toca ao officio [sic] de mercador”; “attinentia ad munus mercatoris (商人の仕事に關すること) . “sự dâm dục”: “o que toca cousas deshonestas [sic]”; “pertinêtia [sic] ad venerea” (不正/性的なことに関すること)。

³⁰ Học hành は漢越語で、漢字で書くと「学行」。学習し行ふことを総じて言う。

が記されている。

・ **Không**

- Rhodes (1651b) : ラテン語で “vacuus” (「空の」) と、内容語の意味のみ記されている。

- Taberd (1838) : “nihil, non, vacuus” と記され、用例の中に “**Không làm: non facere**” (「しない」)³¹ と、否定の用法が書かれている。

- Huình Tịnh Paulus Của (1895) : 否定の副詞としての意味が記され、用例にも否定や疑問の用法のものが多数記されている。

- Khai trí (1931) : 否定の用法がまず書かれ、別の項で内容語の用法が記されている。

- Hoàng Phê (1988) では、否定や疑問の機能語、形容詞 (「空の」)、名詞 (「ゼロ」 「空 (くう)」) の3つの用法が記され、機能語の記述と形容詞の記述の分量が同程度である。

・ **Bị**

- Rhodes (1651b) : 内容語としての用法も、機能語としての用法も、記されていない。³²

- Taberd (1838) : 単独で **bị** に対するラテン語訳は記されていない。“**Bị hỏa tai**” (「火事に遭う」)³³、“**bị tích**” (「負傷する」)³⁴ 等、“**bị + 名詞**” での5つの用例がある。

- Huình Tịnh Paulus Của (1895) : “**Mắc phải**” (「不運なことに…に遭う」) という意味が記され、27の用例が記されている。それらの用例の項目のうち、明らかに “**bị + 動詞**” であるのは7つである³⁵ が、用例の項目を説明する文章中に、“**bị + 動作主 + 動詞**” の形が5回用いられている。³⁶

- Khai trí (1931) : “**Mắc phải**” (「不運なことに…に遭う」) という意味が記され、4つの用例が記されている³⁷ が、“**bị + 動作主 + 動詞**” の形は書かれていない。

³¹ Làm は「する」。

³² “**Bị phũ ba**” (現代式表記にすると “**bị phung ba**”) で「嵐、時化」の意味があると書かれている。(ポルトガル語: tormenta. ラテン語: tempestas in mari). これは Taberd (1838) における **bị** の5つの用例のうちの1つに “**bị phong ba**” (漢字・チュノムで「被風波」) とあるのと関係があると考えられる。しかし、Taberd (1838) ではラテン語訳で “**magnis tempestatibus moveri**” (「大きな嵐に動かされる」) と、動詞句で捉えられているのに対し、Rhodes (1651b) では名詞句で捉えられているため、「被る」という意味の **bị** であると断定することはできない。

³³ 漢字・チュノム表記では「被火災」、ラテン語訳は “**ferre incendium**”。

³⁴ 漢字・チュノム表記では「被跡」、ラテン語訳は “**sauciari**”。

³⁵ “**Bị vây**” (包囲される)、“**bị bắt**” (捕まる)、“**bị chết chém**” (斬殺される)、“**bị đuổi**” (追い払われる)、“**bị ăn trộm**” (泥棒に入られる)、“**bị ăn cướp**” (強奪される)、“**bị chìm ghe**” (ジャンク船を沈められる)。他の用例では、**bị** の後に来るのは名詞、名詞とも動詞ともとれるもの、または判別の難しい古語等である。

³⁶ “**Bị hại**” (殺害される)の説明で、“**bị người ta giết**” (人に殺される) (“**người ta**” は広く人一般を指す)。“**Bị gai**” (“**gai**” は「とげ」の意だが、このような用法は、現代語辞典や現代書かれた古語辞典には記載がない。同辞書の “**gai**” の欄にも “**bị gai**” で「狙撃される」の意味がある。)の説明で、“**bị đạn bắn nhảm**” (銃弾に狙撃される) (đạn: 弾, bắn: 撃つ, nhảm: 狙う)。“**Bị bắt**”の説明で、“**bị người ta bắt đặng**” (人に捕らえられる) (đặng は可能等を表し, được とほぼ同じ)。“**Bị ăn cướp**”の説明で “**bị kẻ cướp lấy đồ**” (泥棒に物を取られる) (kẻ cướp: 泥棒, lấy: 取る, đồ: 物)。“**Bị bói**” (他の辞書に記載なし。Bói は船上のかっぱらい)の説明で “**bị quân gian vật dưới ghe dưới sông lấy của**” (悪い一味に川の船で所有物をむしり取られる)。

³⁷ “**Bị bệnh**” (病気にかかる)、“**bị nạn**” (災難に遭う)、“**bị thương**” (負傷する)、“**bị đòn**” (殴られる)。なお、“**bị cáo**” (被告)等の熟語の一部としても書かれている。

- Hoàng phê (1988) : 3.4.に記したのと同様、主語が喜ばしくないまたは利益のない動作を被ることを表す動詞と書かれ、用例では *bị* の後に名詞が置かれるもの、動詞が置かれるもの、「動作主 + 動詞」が置かれるものがともに書かれている。³⁸

6と7.の分析を合わせると、少なくとも書かれた言語においては、*của* と *sự* は19世紀末以降、*không* と *bị* は18世紀後半から19世紀前半に、文法化されたと見ることができる。以下、これらの時代の各文献を参照し、各文法事項の表現方法の推移を簡潔に俯瞰することで、文法化の過程をより正確に把握することを試みる。

8. 同様の文法事項を表す従来の表現

8.1. 従来の属格表現

『新編傳奇漫録』において、通常の属格表現においては特に何も機能語が用いられずに表現される。

(39) 漢: 經項王祠下 [項王の祠の下を經(ふ)] <1:2a:7>

喃: 戈 鄴 廟 項王

Qua dưới miếu Hạng Vương.

過ぎる 下 廟 項王

“項王の廟の下を通り過ぎた。”

12世紀または15世紀の『佛說大報父母恩重經』では「父母深恩」が“*on nặng áng nà*”と訳されている箇所が9箇所ある(“*on*”は「恩」、「*nặng*」は「重い」、「*áng nà*」は「父母」で、「父母の重い恩」の意)。ここでも属格の機能語は用いられていない。しかし、例文(10)に示したように、現代語では所有対象と所有者の間に形容詞等の修飾語が入る場合、*của* を省略することができない。現代語で属格表現の機能語が必要になる場合でも、従来は通常何も用いずに表されていた。³⁹

ただし、漢文で属格を表す際に助詞の「之」や指示代名詞「其」が用いられることが多くあり、対訳資料でのベトナム語訳文ではそれぞれ *chung* や *thừa* といった語に機械的に訳されている。

助詞の「之」は、属格に限らず、限定を表すために用いられる。『新編傳奇漫録』においては、以下の例のように「之」が用いられ、*chung* に訳されている。⁴⁰

³⁸ “*Bị tai nạn*” (災難に遭う)、“*bị mất cắp*” (盗まれる)、“*nhà bị dột*” (家が雨漏りしている)、“*bị người ta chê cười*” (人に嘲笑われる)。なお、名詞として「被告側の略」という用法も書かれている。

³⁹ 『佛說大報父母恩重經』で所有表現に *của* を用いていないことについては Vũ Đức Nghiệu (2014) が示している。

⁴⁰ 助詞「之」は770回用いられ、そのうち752回は *chung* に訳されている。

(40) 漢: 馮之子名仲達 [馮の子、名は仲達(ちゅうき)] <I:15b:4>

喃: 蒸 昆 粍 戸 馮 尅 羅 昉 仲達
Chung con trai họ Phùng tên là người⁴¹ Trọng Quý.
 CHUNG⁴² 子供 男 姓 馮 名 コピュラ 人 仲達
 “馮氏の男の子は、名は仲達といった。”

ベトナム語の基本語順に則り語順が変わり、修飾語が被修飾語の後ろに置かれ、chung が被修飾語の前に置かれている(「A 之 B」→ “chung B A”)。⁴³

古語辞典等によると、chung の従来広く認められる用法は、場所や時点等を表す前置詞であり、『新編傳奇漫録』等の対訳資料では「於」「于」などの前置詞の訳としても多く用いられる。⁴⁴ Trịnh Kim Ngọc (2008: 75, 85) によると、『8 日間の講義』の中で chung は 211 回使われるが、すべて原因を表す熟語 vì chung の一部であり、上記のような用法はない。⁴⁵ 現代ベトナム語では、chung は単独での用法はなく、原因を表す熟語 vì chung や bởi chung の一部としてのみ用いられる (Hoàng Thị Tuyền Linh 2011)。⁴⁶

また漢文で、既出の人や事物(原則として三人称)が所有者となる場合、「其」という語が用いられる。『新編傳奇漫録』では「其」は機械的に thừa という語に訳される。⁴⁷

(41) 漢: 利其土地驕其甲兵 [其(その)土地を利し、其の甲兵を驕る] <I:9a:7>

喃: 悶 所 坦墾 誇 所 矛麻
 Muốn thừa đất đai, khoe thừa mâu ma
 欲する THUA⁴⁸ 土地 自慢する THUA 兵力
 “(秦は) その (秦の) 土地を欲し (濫用し)、その兵力を自慢した。”

Trần Trọng Dương (2014) の辞書⁴⁹ によると、thừa の用法は 4 つある：①「場所」を表す

⁴¹ 「人」を意味する一般的な名詞 người (チュノムでは「導」とは異なる語。同等から目下の人に対して使う人称代名詞かつ呼称であり、二人称で用いると「汝」のような意味になる。日本語には的確な訳はないが、グロスでは便宜的に「人」とした。

⁴² Chung の意味は一概に定めるのが難しいため、グロスでは一括して CHUNG とする。

⁴³ 属格以外に、限定を表す表現の例として、興攻秦之師 [秦を攻むるの師を興す] <I:4b:1> のように動詞句や節を修飾語として「之」の前に置く表現もある。このような場合でも、「之」は chung に訳され、「A 之 B」→ “chung B A” となる。Chung の用法については鷺澤 (2016, 2017) で述べた。

⁴⁴ 15 世紀の韻文『國音詩集(Quốc âm thi tập)』や、12 または 15 世紀の『佛說大報父母恩重經』では、助詞の「之」に相当するような chung の用法はなく、専らこの前置詞の用法のみで用いられる。このような chung の用法についても鷺澤 (2016, 2017) 参照。

⁴⁵ 17 世紀初頭の『天主聖教啓蒙 (Thiên Chúa Thánh giáo khai mông)』(Maiorica 1623) では chung は 64 回用いられている。そのうちの 58 回は理由を表す vì chung の一部、残りの 6 回は前置詞としての用法である。

⁴⁶ どちらも一般的に用いられる語ではなく、比較的古風な印象がある。

⁴⁷ 「其」は属格と関係なく指示詞となったり、既出の語の代わりに主語となったりする用法もあり、それらもほぼ機械的に thừa に訳される。『新編傳奇漫録』では「其」が用いられる 335 回中、328 回 thừa に訳される。また、後続語を名詞化する助詞「所」の訳語としても用いられる。Thừa に関する詳細は Washizawa (2018) に示した。

⁴⁸ Thừa の用法も一概に定め難いため、グロスでは一括して THUA とする。

⁴⁹ 15 世紀の『國音詩集』の中にある古語を解説している。

名詞；②田んぼの面積を数える単位；③後置の語を名詞化する用法を持つ語⁵⁰；④所有代名詞「自分の」。現代語には ②の用法のみ残っている (Hoàng Thị Tuyền Linh 2011)。「其」の訳語としての用法は、④に相当する。③の名詞化の用法については、8.2. で述べる。

Thừa は『8 日間の講義』では一度も用いられない。本研究で参照した資料のうちでは、17 世紀以降の他の資料でも *thừa* は一度も見られなかった。

なお、『8 日間の講義』では、属格表現はほぼすべて、16 世紀までと同様に何の標識も伴わない所有者の後置により表されるが、一部に、(42)のように *về* を用いた表現が見られる。*Về* は例 (4) のように現代語では「～について」の意味を持つが、内容語としては「帰る」の意味があり、「帰する」の意味に転じていると考えられる。⁵¹

(42) *Đàng thứ nhất là đàng về kẻ hay chữ, gọi là đạo Nho.*
道 第一 コピュラ道 帰する 者 有能な 字 呼ぶ コピュラ 教え (道) 儒

Đàng thứ hai là đàng kẻ thờ quỷ, ma làm việc dối, gọi là đạo Đạo.
道 第二 コピュラ 道 者 拝む 悪霊 悪魔 する 仕事 騙す 呼ぶ コピュラ 教え 道

Đàng thứ ba là đàng kẻ thờ bụt, gọi là đạo Bụt. (pp. 104-105)
道 第三 コピュラ 道 者 拝む 仏 呼ぶ コピュラ 教え 仏

“第一の道は、字に長けた者たちの道で、儒教と呼ばれる。第二の道は、魔術師たちの道で、道教と呼ぶ。第三の道は、仏を拝む者たちの道で、仏教と呼ぶ。”⁵²

構造の似た 3 文が並べられ、1 つ目は *về* が用いられているが他は何も機能語が用いられていないこと、ラテン語文ではすべて属格が用いられていることから、この *về* が属格の用法を持っていることが明らかである。17 世紀前半の『天主聖教啓蒙』(Maiorica 1623) でも、*về* の属格用法が一部に見られる。

(43) 些 軍 國 衛 桐 駁 遠 歇 各 桐 (p.23 (324), 1.7)⁵³

Ta là quân quốc về vua cả trên hết các vua.

我々 コピュラ 軍 国 帰する 王 大きい 上 すべて 各 王

“我々はすべての王の中の大王の国軍だ。”

8.2. 従来の名詞化表現

⁵⁰ *thừa câu*: 求めているもの || *thừa trách*: 責めること || *thừa nguyện*: 願い事 || *thừa nuôi*: 育てること || *thừa được*: 得たもの || *thừa làm*: なしたこと

⁵¹ 前述の Huỳnh Tịnh Paulus Của (1895) の辞書では、*của* の意味として *về* を用いている。

⁵² ラテン語文は、“*Prima est literatorum quam Nhu vocant; secunda veneficorum, quam dicunt dao; tertia idolatrarum, quam vocant but.*” 現代フランス語訳は、“*La première est celle des lettrés, que l’on appelle Nhu; la seconde celle des sorciers, que l’on appelle Dao; la troisième, celle des idolâtres que l’on appelle But.*”

⁵³ 「23」は、2003 年に発行されたラテン文字翻字版でのページ。ラテン文字翻字の後にチュノム版原本のコピーが刷られており、続けてページ数が振られている。続けて振られたページ数で「324」が、チュノム版での当該部分。

ため、初めにラテン文字翻字のページ数を示し、括弧内にチュノム版のページ数を記した。

Sự の文法化以前、名詞化を表す機能語は特になかったといえる。『新編傳奇漫録』から引いた例文(44)、(45) の2音節の形容詞 lung lǎng および uy nghiêm は名詞化されており、現代語では sự を用いることのできる状況であるが、ここでは機能語が使われていない。

(44) 漢: 禳送愈加則憑陵愈肆 <III:36a:8>

[禳送(じょうそう)愈(いよいよ) 加ふれば則ち憑陵(ひょうりょう)愈 肆(ほしいまま)にす]

喃: 祭 送 強 夥 時 籠陵 強 籠弄

Té đưa càng lắm thời lung lǎng càng rông.

祭る 送る ますます 多い すなわち⁵⁴ 横暴な ますます 放し飼いの

“お祓いを多くすればするほど、勢いをたのんだ横暴は手が付けられないほどになった。”⁵⁵

(45) 漢: 願使君重養威嚴 [願はくは使君重く威嚴を養はんことを] <IV:58a:6>

喃: 嗔 使君 弼 餽 威嚴

Xin Sứ quân cả nuôi uy nghiêm⁵⁶

請う 使君⁵⁷ 大きい 養う 威嚴のある

“あなたが大いに威嚴を養われるようお願いします。”⁵⁸

現代ベトナム語では3.2.の最後に述べたような名詞化機能を持つ多様な語があるが、これらの中には名詞との区別が難しいものもある。従来も同様に、名詞を用いて名詞化がなされることが多かった。例えば、次の『新編傳奇漫録』の例文では、「言葉」を意味する lời で名詞化がなされていると言える。⁵⁹

(46) 漢: 尤長規諷嘲諷 [尤(もつと)も規諷嘲諷に長(た)く] <I:2a:3>

喃: 強 賤 蒸 例 咈 𪛗 例 昭 嗽

càng dài chung lời dạy dỗ, lời trêu giễu

さらに 長い ~に 言葉 教え導く 言葉 嘲る からかう

“教えたりからかったりすることにとりわけ長けていた。”

8.1.でも取り上げた助詞の「之」は、主部と述部を結んで名詞節を作るという機能もあり、名詞化機能を担っている部分もあるといえる。『新編傳奇漫録』ではこれらの「之」も chung に訳されるが、「A 之 B」→ “chung BA” のように、語順を変えずに訳されることが多い。

⁵⁴ 対訳資料では「則」はほぼ常にこの語に訳される。

⁵⁵ Ngô Văn Triện による現代ベトナム語訳では、“Càng bùa bèn trừ yểm, sự quấy nhiễu càng tệ hơn trước.” となり、sự が使われている。(quấy nhiễu は「迷惑をかける」の意)

⁵⁶ oai nghiêm とも。

⁵⁷ 使者に対する尊称。

⁵⁸ Ngô Văn Triện による現代ベトナム語訳では、“Xin Sứ quân giữ sự uy nghiêm”と、sự が使われている。

⁵⁹ ここでは動詞が2音節語であり、現代語で sự を用いることができる条件と合致する。

(47) 漢: 廷臣忌立言之直 [廷臣立言の直なるを忌む] <I:16b:1>

喃: 碎 廷臣 嗔 昀 立言 蒸 儼

Tôi đình thần ghét người Lập Ngôn chung thẳng.

臣下 廷臣 嫌う 人 立言 CHUNG 真っ直ぐである

“廷臣は立言が実直であるのを嫌った。”

(48) 漢: 天之陽報已諄諄於夢寐之間 <I:59b:4>

[天の陽報 已(すで) に夢寐(むび) の間に諄諄(じゅんじゅん) たり]

喃: 歪 蒸 嚙 報 包 懇 懇 於 蒸 課 夢 寐

Trời chung rõ báo, đã khẩn khẩn ở chung thuở mộng寐

天 CHUNG 明らか 報いる すでに しつこい ~に CHUNG 時 夢寐

“天のはっきりした良い報いは、眠って夢を見る間にすでに繰り返し教えられていた。”⁶⁰

また、「其」「所」により名詞化されているといえる箇所、機械的に訳される thừa にも、名詞化の用法が一部にあるといえることができる。

(49) 漢: 生雖恨其失節 [生其の失節を恨むと雖も] <IV:8a:2>

喃: 昀 張生 雖 恨 所 失節

Người Trương Sinh tuy giận thừa thất tiết,

人 張生 ~と雖も 怒る THUA 失節

“彼（張生）は彼女の節操を失ったさまを恨んだが、”

(50) 漢: 惟娘所命 [惟(ただ)娘の命ずる所] <I:20a:6>

喃: 盃 娘 所 遣

Bui nàng thừa khiển.

ただ 娘 THUA 命じる

“ただあなたがお命じになること（を行います）”

8.1.で取り上げた Trần Trọng Dương (2014) の辞書に書かれている、後置の語を名詞化する語としての thừa の用例には、thừa trách 「責めること」や thừa nuôi 「育てること」といったものがある。これは、漢文の「所」が動詞の対象、場所、理由等を表すことによって名詞化するのと異なっている。しかし、『新編傳奇漫録』の thừa の名詞化の用法は、すべて「所」の名詞化の用法と同一である。15世紀には thừa がより広い用法を持っていたが、16世紀までに狭まり、対訳資料で固定的に「所」の訳語として用いられたと思われる。なお、8.1.で

⁶⁰ Ngô Văn Triện による現代ベトナム語訳で、「天之陽報」は “sự dương báo của trời” と、sự を用いて訳されている。

も述べたように、このような用法を持つ chung や thừa は、17世紀のキリスト教関係の資料では見られなくなる。

8.3. 従来の否定表現

Không の文法化以前、否定を表す語は一般的に chẳng であった。また、chẳng も用いられることがあった。『新編傳奇漫録』では、否定の「不」や「弗」はすべて chẳng に訳される。『新編傳奇漫録』では chẳng は、「無不（～ざるは無し）」や「非不（～ざるに非ず）」などの二重否定の際の1つ目の否定語として、また、諾否疑問の文末において用いられた。

(51) 漢: 往無不獲 [往にして獲ずは無し] <I:26a:4>

喃: 恒 庄 羅 拯 特
 Hăng chẳng là chẳng được.
 常に 否定 コピュラ 否定 得る
 “常に手に入れられないことがなかった。”

(52) 漢: 爾肯從否 [爾(なんぢ) 肯(あへ)て從ふや否や] <I:33b:6>

喃: 眉 肯 蹠 庄
 Mày khúng theo chẳng?
 お前 同意する 従う 否定
 “お前はすすんで従うか。”

現代ベトナム語では、chẳng は chẳng qua 「～に過ぎない」(qua: 過ぎる)等の固定的な表現にのみ使われる。諾否を表す chẳng は、現代でも格式ばった場面では用いられる。本研究の対象資料では、18世紀までは chẳng や chẳng が広く用いられるが、19世紀『北圻訪問』では、chẳng の使用は3回(うち1回は上述の chẳng qua)、chẳng は2回にとどまっている。

8.4. 従来の受身表現

Bị が受身で用いられるようになる前、受身を表すために広く使われた語は phải であった。Phải は多義語で、他に「正しい」という意味があり、この意味での用法としては、『新編傳奇漫録』で漢文の動詞「然」(しかり)等の訳語で用いられている箇所がある。

『新編傳奇漫録』では、「被 + 動作主 + 動作」が“phải + 動作主 + 動作”に訳される箇所が4つある。そのうちの1つが、例文 (53)である。

(53) 漢: 被彼攻驅 [彼に攻め驅(か)らる] <II:41b:4>

喃: 沛 侈 箕 打 蹠
 Phải đũa kia đánh đuổi.
 受身 やつ あの 打つ 追い出す
 “彼に攻められて追い出されてしまった。”

また、漢文の「爲 + 動作主 + 所 + 動作」も受身を表すが、『新編傳奇漫録』ではこの「爲」も *phải* で訳す。通常は「する」を意味する *làm* で訳されるため、受身の意味が意識されているとすることができる。しかし、「所」と機械的に対応する *thừa* も入っていることから、“*phải...thừa...*” の構文はベトナム語に備わっていたものではなく、逐語訳により固定化されたものである可能性が高い。

(54) 漢: 我爲兵戈所礙 [我兵戈(へいくわ)の礙(さまた)ぐる所と爲る] <I:21a:6>

喃: 仲達 沛 役 銅 博 所 垠
 Trọng Quý phải việc đồng bác thừa ngãn
 仲達 受身 こと 戈 薙刀 THUA 阻む

“私（仲達）は、武器（戦）によって道を阻まれてしまった。”

漢文の受身を表す助動詞「見」は、『新編傳奇漫録』では「見る」を表す動詞 *thấy* で訳される (鷲澤 2016: 287, 鷲澤 2017: 101)。ただし 1 か所、*phải* で訳されているところもある (<III:56b:5>)⁶¹。

Phải は「正しい」の意味と共に「～しなければならない」の意味でも用いられるようになり、17 世紀以降は、これらの意味での用法が拡大するとともに、受身での用法は狭まっていった。

8.1.~8.4.をまとめると、次のようになる。属格および名詞化の表現は、18 世紀まで定着していたものがなく、19 世紀以降新たに *của, sự* といった機能語によって表されるようになった。受身も、動作主を伴う表現は稀で定着しておらず、*bị* の使用によってより多用されることとなった。否定の表現は、*không* が *chẳng* や *chăng* に取って代わることとなった。

9. 考察

まず、これらの文法化現象の通言語性を考える。Heine & Kuteva (2007) には、「財産」等を表す名詞から属格への文法化 (Heine & Kuteva 2007: 65-66)⁶²、「被る」ことを表す動詞から受身への文法化 (Heine & Kuteva 2007: 80-81)⁶³ が書かれていて、この 2 つの文法化現象は通言語的であることが認められる。名詞から名詞化標識への文法化については、それと通じる現象として、名詞から補文標識への文法化が挙げられている (Heine & Kuteva 2007: 67)。⁶⁴ 否定詞に関しては、中国語において存在の否定（「没(有)」）が完了の否定となっていることが挙げられているが (Heine & Kuteva 2007: 79-80)、ベトナム語では完了の否定は *chưa* (または *chừa*) という語が続けて使われているため、*không* の文法化の過程が中国語の「没(有)」

⁶¹ 『新編傳奇漫録』での受身の訳については Trần Trọng Dương (2004) が述べている。

⁶² アラビア語で「財産」を表す *bītaʔ* がアラビア語をもととするクレオールのスビ語で *ta* という属格標識となる例や、同系のマルタ語で「財産」を表す *ta'* が属格標識としても用いられるようになっている例が挙げられている。

⁶³ 中国語（漢文）の「被」等が例として挙げられている。

⁶⁴ 日本語の「こと」等が例として挙げられている。

の例と同様とは言えない。また、*chẳng* や *chăng* がなぜ衰退したのかも、未だわからない。

Matisoff (1991: 391) には、「もの」を表すタイ語の *khǒng* やクメール語の *raboh* も属格標識となることが、*của* の文法化と並列に扱われていることから、類似性を指摘できる。

これらのことを書記言語の形成過程という観点から見ると、*của* と *sự* の文法化が 19 世紀後半以降という、西洋との接触が密になる時期と重なることは、大きな意味があると考えられる。1. で先行研究に挙げた Nguyễn Thị Thanh Xuân (2015: 203) では、『北圻訪問』の中で、形容詞を動作の様態を表すために使う際に「方法」を表す *cách* という語を前置して用いており、これは現代語で “*một cách* + 形容詞” (「1 つの～な方法で」) という言い方になるものの前段階で、フランス語の接尾辞 *-ment* を訳したものだと言われている。このように、フランス語をはじめとする西洋諸言語において、属格や名詞化といった文法機能が明確に表されていることが、ベトナム語における新たな文法機能語の使用に影響を及ぼした可能性が考えられる。受身を表す *bị* の文法化はより早い時期に起こったと言えるが、書記言語における使用頻度の増加は、受身をより頻繁に用いる西洋諸言語の影響である可能性がある。一般的に、現在国家等で公的に用いられている言語は、近代的な言語として確立される過程があったと指摘されている (Haugen 1966, 野村 2013)。非西洋語の場合、そこで西洋語の翻訳などからの影響を受けることも多い (柳父 2004)。ベトナムでもこのような過程を経たと考えられ、*của*、*sự*、*bị* の文法化はその一環として起こったとすることができる。*Sự* や *bị*、そして否定の *không* が漢語起源であるということも、書記言語形成の過程という観点からは意味深いように見えるが、明確な因果関係はまだわかっていない。

また、ここで加えて考えるべきことは、ベトナム国内での地域差や方言である。『新編傳奇漫録』は北部で書かれているが、19 世紀の『北圻訪問』を含む初期の近代文学を著した Trương Vĩnh Ký や Nguyễn Trọng Quán は南部出身であり、彼らの作品には南部の方言が表れている。ベトナムの近代的な書記言語の形成に、北部や南部など、どこの方言の各要素がどのように取り入れられたか、明らかにしてこそ、文法史的な変化を正確に捉えることができる。また、その後のベトナムの標準的な書記言語の形成において重要な役割を果たしたとされる『南風雑誌 (*Nam Phong tạp chí*)』(1917～1934 年、北部のハノイで刊行) におけるベトナム語にどのようにつながるのかということも、調べる必要がある。

10. 結論

現代語ベトナム語において文法機能語として頻繁に用いられている *của*、*sự*、*không*、*bị* が、18 世紀以降に文法化されたことを明らかにすることができた。これらの語は名詞や動詞・形容詞に由来するもので、Hopper & Traugott (1993: 94-129) の述べる一方向性⁶⁵に合致し⁶⁶、Heine & Kuteva (2007) に書かれた文法化現象で説明できるものもある。

⁶⁵ どのような要素からどのような要素に文法化するかということに関する通言語的な傾向。名詞・動詞・形容詞といった内容語から文法機能語へ、さらに進むと接語や接辞となる。

⁶⁶ Hopper & Traugott (1993:40-48) は文法化において「再分析」がなされていると説明するが、本研究での 4 つの語のうち、*không* の再分析の過程は説明できなかった。

また、ベトナム語における属格と名詞化は、19 世紀以降になってはじめて特定の機能語で表示されるようになったということも明らかになった。このことは、書記言語として用いられることが限られていたベトナム語が、書記言語として用いられるようになり、より複雑な表現に堪えうる言語となる必要が生じるに際して、高級語彙と共に文法表現も新たに備えた文体を発達させていったことを示す足掛かりとなる。

参考文献：

- Ban văn học Hội Khai trí tiến đức khởi thảo (1931) *Việt-Nam Tự-điền* [ベトナム字典]. Hà Nội: Imprimerie Trung Bac.
- Đình, Văn Đức (2018) *Tiếng Việt lịch sử trước thế kỷ XX: Những vấn đề quan yếu* [ベトナム語、20 世紀以前の歴史：いくつかの重要な問題]. Hà Nội: Nhà xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội.
- Đoàn, Thiện Thuật (収集,編集)(2008) *Chữ Quốc ngữ Thế kỷ XVIII* [18 世紀のクオックグー] Hà Nội: Nhà xuất bản Giáo dục.
- Haugen, Einar (1966) Dialect, Language, Nation. *American Anthropologist*: 68(4), 922-935.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2007) *The Genesis of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Hoàng, Dũng & Nguyễn Thị Ly Kha (2004) Về các thành tố phụ sau trung tâm trong danh ngữ tiếng Việt [ベトナム語の名詞句において核に後置される要素について], *Ngôn ngữ* [言語] 2004, số 4, pp.25-34.
- Hoàng, Đức Quảng et al. (フランス語訳) (1994), Nguyễn Dữ (漢文原文) *Truyện kỳ mạn lục: Vaste recueil de la transmission des merveilles*. Hà Nội: Nhà xuất bản Thế giới.
- Hoàng, Phê 主編 (1988) *Từ điển tiếng Việt* [ベトナム語辞典]. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội.
- Hoàng, Thị Ngọc (1999) *Chữ Nôm và tiếng Việt qua bản giải âm Phật thuyết Đại báo phụ mẫu ân trọng kinh* [『佛説大報父母恩重經』解音資料を通してのチュノムとベトナム語] Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội.
- Hoàng, Thị Tuyền Linh et. al. (2011) *Từ điển tiếng Việt* [ベトナム語辞典]. Hà Nội, Đà Nẵng: Nhà xuất bản Đà Nẵng, Trung tâm Từ điển học.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huỳnh, Tịnh Paulus Của (1895-1896) *Đại Nam quốc âm tự vị* (大南國音字彙). Saigon: SaiGon Imprimerie REY, CURIOL & Cie; Saigon: Nhà xuất bản Trẻ (1998 再版).
- 川本邦衛編 (2011) 『詳解ベトナム語辞典』東京：大修館書店。
- Maiorica, Jeronimo (1623) *Thiên Chúa Thánh giáo khai môn* (天主聖教啓蒙). ラテン文字翻字版：(2003) Hà Nội: Lưu Hành Nội Bộ Giáo hội Công giáo.
- Matisoff, James A. (1991) Areal and universal dimensions of grammaticalization in Lahu. In: Traugott, E.C. and B. Heine, *Approaches to Grammaticalization vol. II, Types of grammatical markers*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 383–454.

- Nguyễn, Hoàng Anh (2004) *Đặc trưng cấu trúc và ngữ nghĩa của danh ngữ tiếng Hán hiện đại (trong sự đối chiếu với tiếng Việt)* [現代漢語の名詞句の構造と意味の特徴 (ベトナム語との対照にて)], 文学博士論文 5.04.08.
- Nguyễn, Quang Hồng (翻音、註解) (2001) Nguyễn Dữ (漢文原作), Nguyễn Thế Nghi (字喃文訳) *Truyền kỳ mạn lục giải âm* [傳奇漫録解音] Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội, Hà Nội.
- Nguyễn, Thị Thanh Xuân (2015) *Chuyến đi Bắc Kỳ năm Ất Hợi và Thầy Lazarô Phiền*, đặc điểm văn bản và những đóng góp vào sự phát triển của chữ-văn Quốc ngữ nửa cuối thế kỷ XIX [『乙癸年北圻訪問』と『ラザロ・フィエン先生』、文献的特徴と19世紀後半のクオックグー発展への貢献]. *Tạp chí Phát triển Khoa học và Công nghệ* 5X: 200-208.
- Nguyễn, Thị Thuận (2003) *Danh hóa trong tiếng Việt hiện đại* [現代ベトナム語の名詞句]. Luận án tiến sĩ Ngữ văn [文学博士論文], Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn, Đại học Quốc gia Hà Nội.
- Nguyễn, Trọng Quản (1887) *Thầy Lazarô Phiền* [ラザロ・フィエン先生]. Sài Gòn: Nhà xuất bản J. Linage.
- 野村剛史 (2013) 『日本語スタンダードの歴史：ミヤコ言葉から言文一致まで』東京：岩波書店.
- Rhodes, Alexandre de (1651a). *Catechismus pro ijs, qui volunt suscipere Baptismus, in octo dies divisus. Phép giảng tám ngày cho kẻ muốn chịu phép rửa tội mà vào đạo thánh đức chúa blời* [罪の洗礼を受け神の聖教に入ることを願う者のための8日間の講義]. Roma: Sacrae Congregationis de Propaganda Fide. 原本のコピー、現代式ベトナム語表記法への翻字、および現代フランス語訳：Nguyễn, Khắc Xuyên 編 (1993) Thành phố Hồ Chí Minh: Tủ Sách Đại kết. (デジタルデータは http://vi.wikisource.org/wiki/Phép_giảng_tám_ngày [2019年4月アクセス] をもとに作成)
- Rhodes, Alexandre de (1651b). *Dictionarium Annamiticum [sic] Lusitanum et Latinum* [安南語-ポルトガル語-ラテン語辞典]. Roma: Sacrae Congregationis de Propaganda Fide. コピーと現代ベトナム語訳：Thanh Lăng ほか訳(1991) Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản Khoa học Xã hội.
- Taberd, Jean-Louis (1838) *Dictionarium Annamitico-Latinum* [安南語-ラテン語辞典]. Serampore: Marshman.
- Trần, Trọng Dương (2004). Bước đầu tìm hiểu cách dịch cấu trúc bị động trong *Truyền kỳ mạn lục giải âm*. [『傳奇漫録』中の受身構文の訳し方についての初歩研究] *Tạp chí Hán Nôm* [漢喃雑誌] 3 (64), tr. 34-39.
- Trần, Trọng Dương (2014). *Nguyễn Trãi Quốc âm Từ điển* [阮廌國音辞典]: *A Dictionary of 15th Century Ancient Vietnamese*. Hà Nội: Nhà xuất bản Từ điển Bách khoa.
- Trịnh, Kim Ngọc (2008). *Khảo sát hoạt động của một số hư từ trong tác phẩm “Phép giảng tám ngày” của Alexandre de Rhodes* [アレクサンドル・ドゥ・ロードの『8日間の講義』中のいくつかの虚詞の振舞いの考察]. Luận văn thạc sĩ chuyên ngành ngôn ngữ học [言語学修士論文],

Trường Đại học Khoa học Xã hội và Nhân văn, Đại học Quốc gia Hà Nội.

- Trương, Vĩnh Ký (1881) *Chuyến đi Bắc Kỳ năm Ất Hợi 1876* [1876 乙癸年の北圻訪問]. Saigon: Ban-in Nhà Hàng C. Guillard et Martinon. コピーと英訳 : P. J. Honey 訳 (1982) *Voyage to Tonking in the Year Ất-Hợi (1876)*. London: School of Oriental and African Studies, University of London. (デジタルデータは <http://vanhoanghean.com.vn/muc-luc2/chuyen-di-bac-ky-nam-at-hoi1876> [2019年4月アクセス]をもとに作成)
- Vũ, Đức Nghiệu (2014) Cấu trúc danh ngữ tiếng Việt trong văn bản *Phật thuyết đại báo phụ mẫu ân trọng kinh* [『佛説大報恩重經』の文献におけるベトナム語の名詞句構造]. *Tạp chí Ngôn ngữ* [言語雑誌] 1: 3-19.
- Vũ, Đức Nghiệu (2011) *Lược khảo lịch sử từ vựng tiếng Việt* [ベトナム語語彙史略考]. Hà Nội: Nhà xuất bản Giáo dục Việt Nam.
- 柳父章 (2004) 『近代日本語の思想—翻訳文体成立事情』東京: 法政大学出版局.
- 鷺澤拓也 (2016) 「漢文-チュノム・ベトナム語対訳資料『傳奇漫録』解音における固定的な訳と例外的な訳: 『之』『於』『于』『夫』と虚詞 *chung* を中心に」『東京大学言語学論集』37: 281-301.
- 鷺澤拓也 (2017) 「漢文-古ベトナム語対訳資料における虚詞 *chung* の用法の拡張: 14世紀の『禪宗課虚語録』を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』94: 77-110.
- Washizawa, Takuya (2018) Usage of the Grammatical Word *Thừa* in the Chinese-Old Vietnamese Bilingual Text *Tân biên Truyền kỳ mạn lục* and Comparison with Other Documents. 『東京大学言語学論集』40: 275-293.

Process of Grammaticalization of Function Words *của*, *sự*, *không*, and *bị* in Vietnamese

Takuya WASHIZAWA

takuyawas@gmail.com

Keywords: Vietnamese, historical linguistics, grammatical words (function words, empty words), grammaticalization, formation of written language, chữ Nôm, genitive, nominalization, negation, passive

Abstract

In Vietnamese, there are several words which have grammatical functions (called grammatical words or function words) now but were not used as grammatical words until the 16th century. Among these, we focus on four words, *của*, *sự*, *không*, and *bị*, to clarify in which period they were grammaticalized. For each century from the 16th to the 19th, we take one document. By considering all the cases in which they are used, and by referring to several other documents, it became clear that: the genitive marker *của* (originally a noun meaning “property”) and the nominalizer *sự* (originally a noun meaning “matter”, “thing”, “affair”, etc.) were grammaticalized at the end of the 19th century; the negation marker *không* (originally an adjective meaning “empty” etc.) and the passive marker *bị* (originally a verb meaning “to suffer”), were grammaticalized in the late 18th or the early 19th century. Especially, *của* and *sự* did not substitute for any other words that had genitive or nominalizing functions. Instead, genitive or nominalizing were overtly marked only after the end of 19th century. These grammaticalization processes are found across languages. Since the period of grammaticalization (the 19th century) corresponds to the period Vietnamese developed as a written language (Vietnamese was rarely used as a written language until that period), it is also implied that the Vietnamese language developed new grammatical expressions, as well as new vocabulary, that enabled writers to express modern academic or administrative matters.

(わしざわ・たくや 神田外語大学)